



1号館（手前）および総合研究棟（左奥）と
新病院棟（右奥）

まだ真新しさが残る地下鉄南北線の白金台駅のすぐ横に、医科学研究所（医科研）の正門があります。そこから研究所の建物に向かう道の両側を、春には桜やサツキ、そしてつつじが鮮やかに彩ります。しばらく進むとヤシ科のワジュロやソテツなどの南洋風の植物が形作るロータリーがあり、それを前庭として大正時代に作られたレンガ作りの研究所本館がどっしりと構えています。うっかりすると見落としますが、正門からの道のところどころにマンホールがあり、その蓋には「伝研」と書かれています。このマンホールの蓋と本館は、歴史の匂いを漂わせていてキャンパスを市井の賑わいから隔離させる役割を果たしています。キャンパスでは、疾患遺伝子の作用等に関する先端的医科学研究が進められ、また毎年冬に騒がれるインフルエンザや新興の感染症に対応するためのワクチン開発や、癌などで苦しむ患者に対するオーダーメイド医療確立のための研究が行われています。

医科研の前身は一八九二年に北里柴三郎が初代所長となった私立の伝染病研究所（伝研）です。抗血清やワクチン開発研究で、伝染病の克服に貢献しました。東京大学に移管された後も伝研と呼ばれ続けてきましたが、伝染病研究の基礎を作っていた、生化学、細菌学、ウイルス学、免疫学が大きく進

教育・研究の現場から

医科学研究所

Institute of Medical Science

山本 雅

医科学研究所長

<http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/imswww/index-j.html/>



蛋白質解析室の主力機 MALDI-TOF/TOF 型質量分析計（中央奥）と周辺機器

展し、やがて公衆衛生が改善されると、研究所は感染症のみならず、癌、免疫疾患等の難治疾患を対象とする医学研究の場となってきました。それと共に研究所の名称が医科学研究所に改められています。いまや医科研は、わが国最大級の医学研究機関であり、病気の成り立ちを科学的に探り、その成果を医療に直結させる実験的研究医療の推進を重要な使命としています。正門を入ってすぐのところにある近代医学記念館には伝研時代の様子や今日の医科研の姿が展示され、市民に公開されています。

伝研から医科研に変革してまもなく分子生物学が勃興し、生命科学が革命的に進展しました。さらに今春ヒトゲノム配列の完結宣言が成されたことに象徴されるように、急速にゲノム科学が確立され、生命科学を分子やゲノム情報をベースに推進することが可能になっています。このような研究の潮流を先導してきたと自負する医科研には、二つの研究システムがあります。

一つは真理の探究、知の発見を標榜する基幹研究部門であり、そこでは癌、感染・免疫、脳等を対象とした基礎的医科学研究が行われています。もう一つは社会への貢献を目指した研究センターと病院であり、ヒトゲノムや疾患モデルについての研究と先端医療開発の研究が進められています。そしてゲ

ノム情報をベースにしたこの二つの研究システムの有機的連携は、「システムゲノム医科学」と定義される分野を創出しています。その連携の推進のために、数学者、分子生物学者、生化学者、生理学者、免疫学者、実験動物学者らによる綿密な共同作業が行われています。さらに、これら研究者と医師や看護師らの医療従事者、そして患者の間での崇高な共同作業により、探索型医療が開発されつつあります。二一世紀COEプログラム「ゲノム医科学の展開による先端医療開発拠点」をばねにし、瀟洒で閑静な白金台の街にあるキャンパスで、このような研究医療が日々たゆまずに進められています。

さて、法人化に向かう大学の中にあつて、医科研はこれまで以上にそのアクティビティを高め、大学の発展に貢献することが求められています。しかし、一大学法人の中での自らの位置を確認するだけにとどまろうとは思っていません。病院を持つのが国唯一の大学附置研究所として、日本の医科学の推進において重要な使命を持っており、探索医療ネットワーク、そして医科学ネットワークのハブとしての役割を果たし、また国際学術連携を推進することを重要課題として掲げています。医科研は、これからも国際レベルでの創造的研究を推進し、それを人々の健康と社会の繁栄に役立てることを追及し続けます。



1号館前庭にて医科研のスタッフ集合写真

アジアはひとつである、と岡倉天心は喝破し、これには賞揚、批判さまざまな意見が出されてきました。しかし、アジアの実際を知ること、これなしには何の議論も砂上の楼閣です。東洋文化研究所はこの基礎を探求しています。

東洋文化研究所は本郷構内の南端に近い、一對の獅子像に守られた八階建ての建物にあります。一九四一年に東洋文化を総合的に研究するために東京（帝國）大学に設置された研究所で、現在、汎アジア、東アジア、南アジア、西アジアの四部門と東洋学研究情報センターを擁するアジア研究の専門研究機関です。アジア全域全時代を研究の対象としており、それぞれの部門には現代の政治や経済を専門にする者、アジア各地の人類学的研究をする者、紀元前から現代にいたる諸地域の歴史や文化（宗教、思想、美術、文学）を専門にする者など、多彩な研究者が活動しています。東京大学の附置研究所として所員は皆学内のいずれかの大学院で教育活動にあたっています。研究者三〇名ほどの小さな所帯で、これだけ多様な研究方法、研究対象を扱う部局はあまり類がないでしょう。

一人ひとりの研究者が学問的関心をそその対象に自分の方法で向かっていく、これが基本ですが、多彩なアジアを研究するために所内のみならず、所外の研究者とも協力して研究を進めています。新しい世紀に入った現在、これまで培われてきた研究の成果を新たに組み替え、活性化すべく、所内研究者を従来の地域・分野別体制を越えて四つのグループに分け、二一世紀のアジアについての研究プロジェクトを進めています。

1 東南アジアを結節点とする 地際アジア交易・交流と移民社会の役割

2 アジア諸文化間の多元的共生を求めて ——過去から未来へ——

3 アジア的人間 ——環境系モデルの構築とその実践的検討——

東洋文化研究所

Institute of Oriental Culture

鎌田 繁

東洋文化研究所 教授

<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/>

4 アジア諸社会における エリートのネットワークと文化表象 ——比較研究の試み——

この四つのプロジェクトを通して、アジアの特定の地域や文化の深い理解にとどまらず、各地域が相互に関係し合いながら多面的なアジアの全体を生み出している実相が明かされてくるでしょう。

大きな国際シンポジウムから数人で古典を読む研究会まで、研究所ではさまざまな研究集会が一年中開かれています。一般に公開されているものもあり、研究所のウェブサイトで、研究所で運営しているASNET（東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク）のサイト（<http://www.asnet.ioc.u-tokyo.ac.jp/>）で知ることができます。研究者対象の集会だけでなく、漢籍（中国の書籍）を扱う図書館員養成のため漢籍整理長期研修を毎年行い、またアジアに関心をもつ一般の方むけに毎秋二日連続の公開講座を開いています。

研究所ではこれまで多数の研究報告書や定期刊行物で研究成果を公表していますが、二〇〇一年には所員全員で『アジアを知れば世界が見える』（小学館発行）というアジア理解の入門書を出版しました。さらにアジア研究の国際的な貢献のために、英文のアジア研究誌 *International Journal of Asian Studies* の刊行を決め、創刊号はケンブリッジ大学出版局から本年度内に刊行されます。また東洋学研究情報センターはインターネットを通して各種研究情報やデー

タベースの公開発信を進めています。

研究所は多数の文献資料、造形資料を所蔵し、図書については漢籍の所蔵でよく知られています。近年は、朝鮮語、アラビア語、インドネシア語など多様なアジア言語の書籍収集にも努め、現在、図書は約五九万冊、雑誌は約五六〇〇種所蔵しています。貴重な漢籍やアラビア語写本も含まれます。造形資料には、中国古代の甲骨や古銭などの考古資料、内蒙古の出土資料、世界各地の中国絵画の写真資料、インド・イスラーム史跡の写真資料、西アジア考古資料があります。整理がすみ公開可能なものはさまざまな機会に展示しており、一部は本研究所のウェブサイトで閲覧できます。

過去から現在にいたる文化的歴史的な背景とともにアジアの実像を把握し、アジアのより深い理解に努めることが東洋文化研究所のこれまでの、またこれからの、変わらない基本的責務でしょう。



アラビア語のクルアーン（コーラン）写本。15あるいは16世紀ごろ筆写されたもの。クルアーン第4章20節以下がここに写っている。



『新鑄出像詞林白雪』。倉石武四郎が収集した中国戯曲資料の一種で、現在他に所蔵を知られていない版本。戯曲の近代的研究の始祖ともされる王国維の蔵印がある。



オスマン・トルコ時代の大学者、キャーティブ・チェレビの著した世界誌『ジハンニューマ』（イスタンブール1732年発行）所載の世界地図。



武人像。中国新疆ウイグル自治区トルファンで出土した唐代（8世紀）の彩色木芯塑像。20世紀初頭にシルクロードを調査した大谷探検隊の将来品と伝える。